

2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	無意識で働く防衛機制を捉えるためのマニュアル作成 －TAT プロトコル分析を通して－
キーワード	①TAT、②防衛機制、③マニュアル作成

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ツチャ マチ 土屋 マチ	所属等	AGO メンタルヘルス 研究員
プロフィール	専門は臨床心理学。学生時代から投映法と呼ばれる心理検査（ロールシャッハ法、TAT）に魅せられてきた。最初の就職先であった精神科臨床の場で代表的な投映法検査を用いてアセスメントを行った際、十分に同定することが難しい病理・病態に出会ったことをきっかけに 2005 年頃より本格的にアセスメント研究を行うようになった。今現在もその熱は冷めることなく、研究活動を行っている。		

1. 研究の概要

本研究は、TAT プロトコルを精神分析的視点から分析することを通して、私たちの心の奥深くの無意識水準でうごめく防衛機制を捉えるためのマニュアル作成を目指すものである。

防衛機制は私たちが不安や欲求不満に陥った際に、自分の心を守る無意識的なメカニズムである。精神分析的病理学の立場においては、パーソナリティや心の病態水準によって、常用される防衛機制が異なっていることが知られている。従って、TAT プロトコルにおいて、この防衛機制を的確に読み取ることが可能になれば、《心の臨床場面》において被検査者のパーソナリティ傾向や病理病態水準を比較的容易に把握可能となる。さらに、この把握された防衛機制の《使われ方》を通して、被検査者の意識水準行動の深層にある無意識水準における心理的メカニズムを理解することが可能になると考えられる。

以上を背景として、本研究では以下の 2 点を研究目的とし、検討を行った。

- ① Hartman, AA(1969)、Bellak, L(1971)の Basic TAT set の考え方を基本にし、豊富な情報が得られやすいと推測される TAT 図版 1、2、4、6、7、13MF の 6 図版×100 名（健常者）の 600TAT プロトコルを使用し、それらの TAT プロトコルから抑圧、否認、反動形成、昇華、隔離、取り消し、投影、同一視、退行、の 9 種類を抽出し、その定義づけを検討する。
- ② 各防衛機制に対する TAT プロトコルの具体例を提示するとともに、その TAT プロトコルがどのような根拠でその分類された防衛機制であるかについての理論的説明と根拠を具体的に提示する。

2. 研究の動機、目的

臨床心理学の領域において、代表的な投映法検査と言え、ロールシャッハ法と TAT であることに異論はないであろう。ロールシャッハ法については古くから量的分析システムが多様な立場から検討されており、臨床研究（アセスメント研究、心理治療実践研究など）に利用され、一つの心理臨床的判断基準を提供している。

一方 TAT においては、創始者のマレー（Murray, HA）が、その基礎において精神分析学を学んでいることが重要であると考えており、開発当初から反応内容を量的にではなく、質的に検討する側面を重視していた。このことから分析手法としてシステムティックな量的分析法は、TAT には馴染まないものと考えられ、量的分析方法を展開させてこなかった。このような歴史的経過もあり、TAT にはロールシャッハ法のサインアプローチのような量的分析方法に代わるわかりやすい標準化された分析方法が確立されていない。特に初学者にとっては学習段階にお

ける困難性が大きく、TAT の利用頻度の低さにつながっていると考えられる。そのため、TAT はその豊かな心理アセスメント情報を十分に活かすきれない名前だけが知られた「有名な心理アセスメントの道具」となっているとも言える現状がある。

以上のようなことから本研究の目的は、精神分析的病理学、病態学においては基礎的な概念である防衛機制を TAT プロトコル上の言語表現を根拠にし捉えるという、わかりやすいマニュアルを作成することである。具体的には健常者 100 名の TAT プロトコルの分析を通して、TAT 分析・解釈に役立つツールになりうる防衛機制抽出マニュアルを作成することである。

3. 研究の結果

本研究では、2010 年から 2021 年 3 月にかけて大学生を中心に幅広く収集した 17 歳から 56 歳までの健常者 100 名（男性 48 名、女性 52 名、年齢平均 23.71 歳、SD=8.33）の TAT データを使用した。その 100 名の TAT データの中から防衛機制に関して、広範な情報が得られやすいと推測される図版 1、2、4、6、7、13MF の 6 枚の TAT 図版に対するプロトコル 600 例を分析の対象とした。

収集した TAT プロトコルから防衛機制を理論化したアンナ・フロイト (Freud, A. 1936) が見出した抑圧、否認、反動形成、昇華、隔離、取り消し（やり直し）、投影、同一視、退行、の 9 種類の防衛機制を理論的に整理し、それらを使用している TAT プロトコルから対象となる防衛機制を抽出し、TAT プロトコルの中での意味づけを検討した。判断に迷うものは、精神分析的臨床経験 30 年以上の TAT 研究者と合議の上で決定した。本研究で得られた具体的基準を以下に紹介する。

防衛機制の概念規定と TAT から防衛機制を分析・抽出するための具体的基準マニュアル

① 抑圧 (repression) と②否認 (denial)

TAT プロトコル上で「抑圧」か「否認」かの区別には、かなりの困難を伴うと言われる。「否認」は、その内容を一旦は知覚して、それを否定した形をとるというあり方として同定できる。この「否認」に対して「抑圧」は、TAT 全体への関わり方から推測することになる。すなわち、知的水準においては、特段の問題はなく TAT には協力的であるのに「えー、何これ・・・わからない・・・難しい」という対応になったり、自分の中に“そういうことがあること”を受け入れないあり方、初発反応の著しい遅れとなったりする TAT への関わり方、あるいは、貧困な生産量のプロトコルなどから推測することになる。

「否認」の具体例：

- ・図版 1 「彼は今、食事をしている」という誤認するあり方。
- ・図版 2 木に寄りかかった右の女性を「ほっそりとしてやせており、よく均整のとれた女性」と見る。

「抑圧」の具体例：

- ・図版 1 バイオリンを省略するなど、絵柄の大きな部分を省略する。
- ・図版 4 壁のポスターの女性を見ない。

③ 反動形成 (reaction formation) と④昇華 (sublimation)

小此木啓吾 (1987) によれば、「昇華は成功した防衛 successful defense であり、社会化された形での欲求の満足を得ることのできる防衛です。つまりそれは、欲動を直接的でない対象への置き換えによって社会的に受け入れられるような形で満たす心的な機能をいう」としている。反動形成について馬場禮子 (2008) は、次のように説明する。toilet トレーニングの場面において、子どもの側においては、《今まで通り、したいときにはいつでもどこでも「パーッと出しちゃいたい」》という願望が強い。そんな時に「突然、もの凄くきれい好きになる」事がある。このようにして、自分から躰に積極的に乗って行ってしまふ。そういう躰にのるために、汚したいとか、ごちゃごちゃにしたい、だらしくしたいという方向の欲求を、つまり非常に几帳面、清潔にするという、逆方向のあり方を強めることによって、もっと効果的に抑え込むありかた、このようなメカニズムを反動形成というとしている。この反動形成の特徴は、『過剰なあり方』として感じられるような特徴がある。

「反動形成」の具体例：

- ・ 図版 7BM 会社での仕事について、前日上司から注意されたことを受けて、今話しているところ。昨夜はいろいろ考えて殆ど一睡もできなかったが、言い訳的な説明はしないで兎に角、誠心誠意謝った。今後は上司のお客様に対する姿勢、考え方を学びたいと伝えてわかってもらえたところ。そして握手して別れた。自分としても本当に上司の姿勢に学びたいと思うようになったので、握手して励ましてもらえたことが本当に嬉しかった。

「昇華」の具体例：

- ・ 図版 2 この女性は都会の大学に行っている時、恋人がいました。しかし、卒業後は田舎に帰る約束を両親としていたので、彼と別れて地元の農協に就職して実家に戻りました。彼の事を思い出すと寂しくてたまりません。日記に彼への思いを綴ったり、出さない手紙を書いたりしていました。2年ほどたった頃、高校時代の国語の先生に会って話をしている時に、先生から「出版社には知り合いがいるので、それを小説にしたら」と勧められ、小説は若い女性の間で人気になって、ベストセラー小説家と言われるほどになりました。

⑤ 隔離(isolation)

「物事、出来事」に伴う感情が切り離されて、押し込められており「感情」が自覚できないようにしておくこと。ストーリーを創るのではなく、図版がどのように見えるのかについて、細かく叙述しようとする。TAT プロトコル上においては、実感が伴わない観念と言葉ばかりの叙述になり、そこに伴う「感情の叙述」が欠落して（切り離されて）いるという形をとる。このように「感情を切り離す」ことで、不安感、罪悪感が湧き上がってこないようにしている。

「隔離」の具体例：

- ・ 図版 6GF 女性が家にいると、その時、お父さんが近づいてきました。・・・これからこの女性は、性行為をさせられる・・・以上です、終わり。

⑥ 取り消し、やり直し(undoing)

この「取り消し、やり直し」は、もとのあるがままの欲動がそのまま出てきてしまい、それを次に「打ち消す」というものである。

「取り消し、やり直し」の具体例：

- ・ 人の悪口や非難することを叙述、表現した後で、「ごめんなさい、そんなこと言うつもりではなかった」と言うことによって、negative story を positive story に置き換え、取り消す形をとる。

⑦ 投影(projection)

自分で認めたくない自分の中にある欲動、感情を外部に出して、「自分の中にあるのではなく、自分の外、すなわち他人の中にあるものと考えて」という防衛のメカニズムであり、具体的には、図版にない人物を導入する。無気味な人、幽霊、動物などを追加導入する。図版のある部分について、詳細かつ念入りにストーリーを創る時に、投影のメカニズムが考えられるというものである。Cramer, P(1991)は、追跡、わなにかけられる、逃走などを認識するパターンを挙げ、具体例として、図版 13MF で「既に女性が殺されていたので、彼は逃げようとしている」というプロトコルを挙げている。

「投影」の具体例：

- ・ 図版 1 「彼は、軽蔑してそれを見つめている」
- ・ 図版 13MF 「彼は人殺しだ」のように、登場人物に攻撃性、敵意の感情を見る。

⑧ 同一視(identification)

いろいろな観点からの説明のされ方がある概念である。自分が相手に嫌われていると感じているうちに、だんだん相手の嫌っている感情に自分の方が同一化してきて、「私もあの人が嫌いだ」というようになっていくことである。すなわち、自分が投射した感情に同一化してしまうことである。

「同一視」の具体例：

- ・ 図版 1「バイオリンを持って、お父さんと同じくらい凄いバイオリニストになれるかな」と考えている。
- ・ 図版 2「この男性は、家族で協力して、自分たちの立派な家や畑を作っている。ほぼ出来上がり今、休憩しているところです」というように仲間との交流を通しての成功感とか満足感の表現、あるいはそういう仲間たちと関わることへの欲求の表現に見られる自尊心というような形で見られる。

⑨ 退行(regression)

小此木啓吾・馬場禮子(1972)から、口愛期的退行、肛門期的退行について取り上げる。退行の前提には現実否認があり、その上で以下の特徴が指摘できる。

口愛期的退行の現われの特徴は、i) 口愛期に関連する主題(土屋・赤塚(2015)参照)が見られる。ii) 検査態度に、検査者への甘え、依存が見られる。

肛門期的退行の現われの特徴は、i) 肛門期に関する主題が見られる。ii) 図版の部分の捉え方に、几帳面さ、完全壁、あるいはその捉え方、見方の不全感をめぐる葛藤がみられる。iii) 検査態度に、頑固さ、堅苦しさ、過度の忠実さが見られる。

「退行」の具体例：

- ・ 図版 6GF 自宅に帰って寛いでいたら、帰宅したお父さんが話しかけてきたので、ぺちやくちやおしゃべりをしているところ。
- ・ 図版 6BM 今日は、綺麗好きなおふくろが遊びに来るので、朝から部屋中を綺麗にして完璧な部屋にして迎えた。褒めてもらえることを期待しているところ。

4. 研究者としてのこれからの展望

投射法検査の中でもTATは、分析・解釈方法が難しく、研究者の臨床の立場により多種多様で体系化されていないこと、数量的な結果を得ることができないことから、特に初学者にとっては学習段階における困難が大きく、日本におけるTATの利用は低迷していると言わざるを得ない現状がある。

本研究の今後の展開として、分析に使用した各TAT図版ごとに確認できた防衛機制の出現頻度や種類等を詳細に整理し、初学者のTAT教育にも役立つ、教育に活用できるような形のマニュアルとして整備していきたいと考えている。その上で、本研究をはじめとして、今後のアセスメント研究を行うことを通じて、パーソナリティの把握や病態診断に役立つような具体的なTATの分析・解釈基準を提示し、検査名だけは知られているが、その持ち味については十分に理解されていないことが多いTATが再評価されるような学会活動にまで高めていきたいと考えている。

5. 社会(寄付者)に対するメッセージ

医学の領域における血液検査や画像診断は、身体における異変の発見や確定診断に活用されている。心理臨床の領域で心を映し出す際、血液検査や画像診断に代わるものの一つは、心理検査であり、心理アセスメントにおいて、心理検査はその重要な中核的役割を担っている。投射法による心理検査については、その信頼性と妥当性などの面において疑問視する声があることは事実であるが、その手法は臨床心理学の領域において確固たる地位を確立しており、私自身も投射法が、パーソナリティを多面的にアセスメントでき、実際の臨床の場で優れた切れ味を発揮するものであることを経験してきた。

私にとっての身近な存在である投射法検査であるが、その中でもTATの臨床的利用に関してのマニュアルを作成するという本研究に対して、奨励金の助成対象としていただき、本研究に取り組むことができた。日本私立学校振興・共済事業団の関係者の皆様、ご支援いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。今後も前項で述べたような「これからの展望」に繋がっていくような形で、研究を続けていきたいと考えている。